

1 松帆銅鐸同範関係の調査成果について

松帆銅鐸7点のうち、3組4点の同範関係が明らかとなった。

- ① 松帆2・4号銅鐸と慶野中の御堂銅鐸（南あわじ市）、3号銅鐸と加茂岩倉27号銅鐸（島根県）、5号銅鐸と荒神谷6号銅鐸（島根県）が同範関係であることがわかった。
- ② 松帆2・4号銅鐸・慶野中の御堂銅鐸は、松帆2号銅鐸が最も遅れて铸造されたと考えられる。
- ③ 松帆5号銅鐸・荒神谷6号銅鐸は、荒神谷6号銅鐸が後の铸造と思われるが、2個ともに範傷が顕著であるため、これらより先に铸造された銅鐸があった可能性が考えられる。
- ④ 出土地不明銅鐸2個（東京国立博物館蔵 J-36667・池田氏蔵）の左下区にも「工」字状の図像があり、松帆3号銅鐸や加茂岩倉27号銅鐸の「王」字状と同様の意味を有する図像であったと考えられる。
- ⑤ 松帆銅鐸は範傷が少なく、同範関係の中でも初期の铸造のものが多いと思われる。

2 評価と意義

- ①他遺跡出土の銅鐸との同範関係が判明したことで、この段階の銅鐸の製作地や流通の研究に重要な資料となる。
- ② 同範銅鐸の鉛同位体比等の分析を行うことで、材料金属の流通や入手状況の実態の解明が進むと考えられる。
- ③ 加茂岩倉遺跡と荒神谷遺跡はこれまでに同範関係はなかったが、松帆銅鐸を介しての関連性が考えられるようになった。
- ④松帆銅鐸の同範関係を検討していくことで、弥生時代の青銅器文化や社会状況を明らかにする重要な資料である。

3 今後の予定

- ① 残りの6・7号銅鐸の同範銅鐸調査を引き続き実施。
- ② 銅鐸内部に付着した植物遺体の、種の同定および放射性炭素年代測定を実施。
- ③ 銅鐸の鉛同位体比分析を実施し、青銅材料の産地推定を行う。



慶野中の御堂銅鐸 A 面



松帆 4 号銅鐸 A 面



松帆 2 号銅鐸 A 面



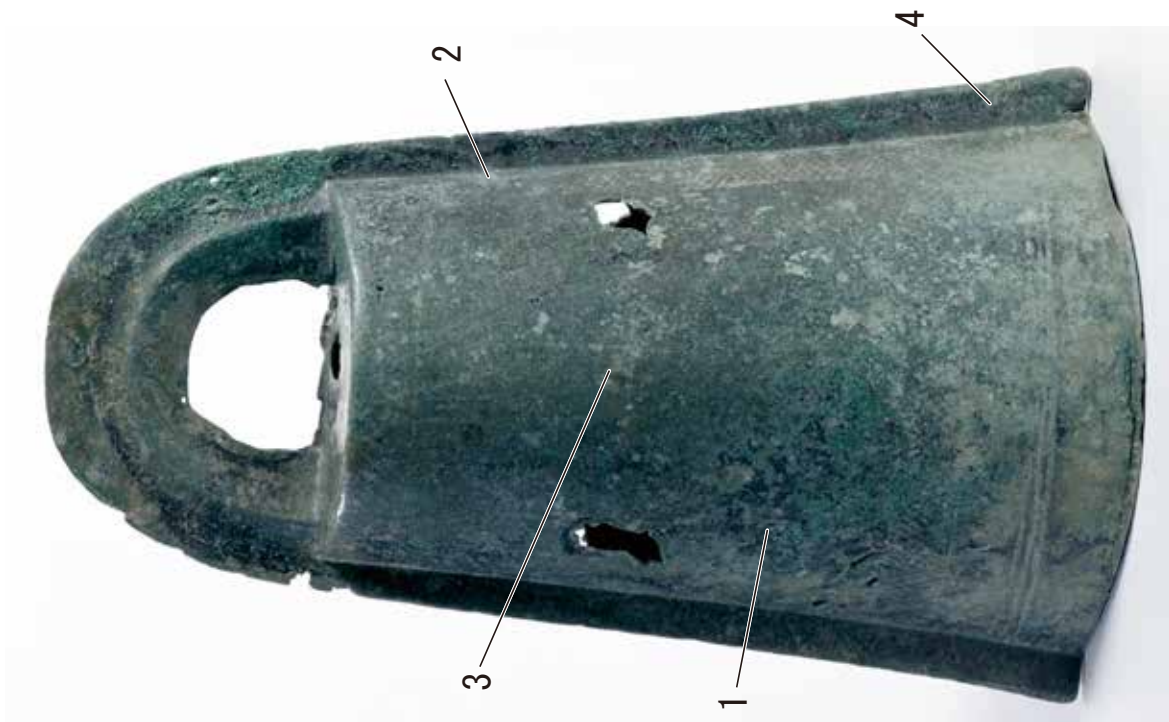
慶野中の御堂銅鐸 B 面



松帆 4 号銅鐸 B 面



松帆 2 号銅鐸 B 面



加茂岩倉 27 号銅鐸 A 面

(島根県教育庁提供)



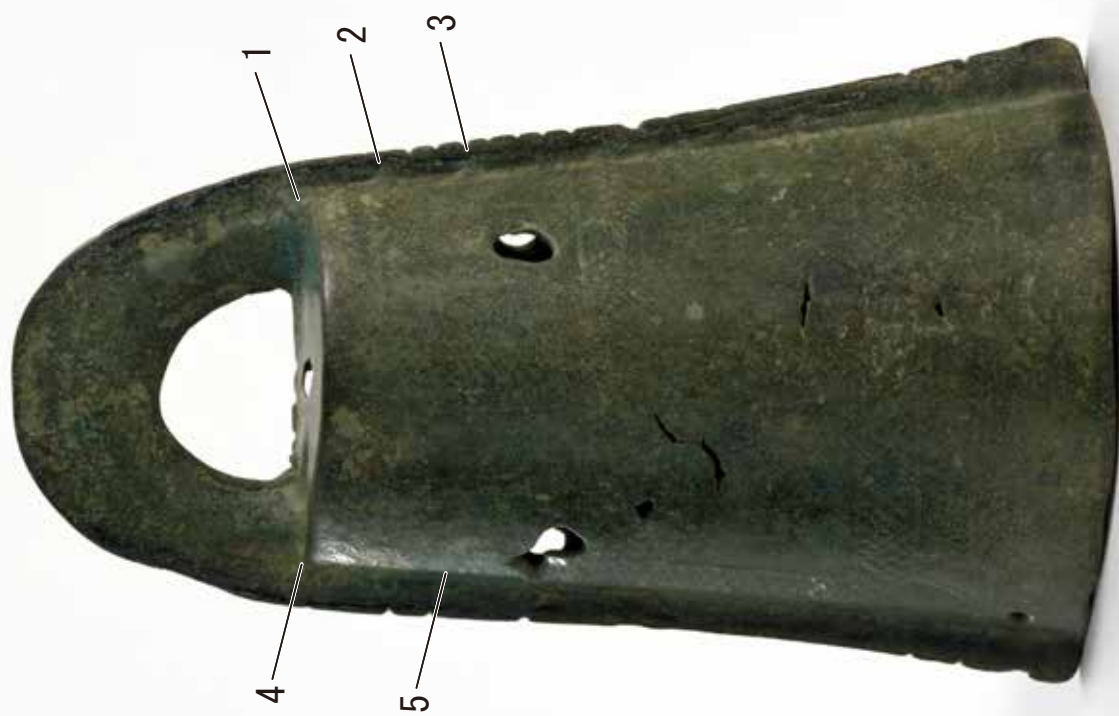
松帆 3 号銅鐸 A 面



加茂岩倉 27号銅鐸 B面
(島根県教育庁提供)



松帆 3号銅鐸 B面



荒神谷 6 号銅鐸 A 面

(島根県教育庁提供)



松帆 5 号銅鐸 A 面



荒神谷 6 号銅鐸 B 面
(島根県教育庁提供)



松帆 5 号銅鐸 B 面

松帆銅鐸相互の同範関係および他遺跡出土銅鐸との同範関係

2016. 10. 13 奈良文化財研究所客員研究員 難波洋三

兵庫県南あわじ市松帆付近出土と考えられる7個の銅鐸については、三次元計測のための仮のクリーニングが終わったのち、難波が同範関係を検討してきた。その結果、以下の3組の同範関係を確認できた。

- ①松帆2号銅鐸—松帆4号銅鐸—南あわじ市慶野中ノ御堂銅鐸
- ②松帆3号銅鐸—島根県加茂岩倉27号銅鐸
- ③松帆5号銅鐸—島根県神庭荒神谷6号銅鐸

【松帆2号銅鐸—松帆4号銅鐸—南あわじ市慶野中ノ御堂銅鐸 の同範関係】

松帆2・4号銅鐸は、クリーニングにより、A面の鈕の菱環外斜面に斜格子文を飾るといふ類例の少ない特徴を有することが判明した。そこで、同じ特徴を有し大きさがほぼ同じ慶野中ノ御堂銅鐸との同範関係を検討した。慶野中ノ御堂銅鐸の、B面左下区には右向きのシカの絵があるが、松帆2・4号銅鐸を検討したところ、松帆4号銅鐸の同じ位置にシカの頭・首・胴の一部を確認できた。このシカの絵は松帆2号銅鐸では確認できないが、これは湯回り不良などに起因するのであろう。さらに、共通する範傷も確認できた。3個の中で範傷が最も顕著であるのは松帆2号銅鐸のようであり、これが最も遅れて铸造された可能性がある。

【松帆3号銅鐸—加茂岩倉27号銅鐸 の同範関係】

松帆3号銅鐸の、A面の左下区には「王」字状の図像がある。ほぼ同大の島根県加茂岩倉27号銅鐸のA面左下区にも類似の図像の一部が確認できるので、両者の同範関係を検討した。2個共に目立った範傷はなく、同範品の中でも早い段階に作られたものと考えられる。しかし、詳細に検討した結果、加茂岩倉27号銅鐸で確認されているA面右鱗の上部と下部の小さな範傷およびA面中縦帯の中央部の斜格子文の欠損が松帆3号銅鐸にもみられることから、2個が互いに同範であることが判明した。また、2個の銅鐸のB面右鱗外周下部には段がある。この段は、鑄型の両面に彫り込まれた銅鐸下部の幅がB面でやや狭く、鑄型小口の合印がやや偏って刻されていたことに起因して生じたと考えられる。両銅鐸の鑄造の前後関係はまだ明確でない。

出土地不明東京国立博物館蔵銅鐸（J-36667）と出土地不明池田氏蔵銅鐸は、松帆3号銅鐸や加茂岩倉27号銅鐸と同じ左下区に、「工」字状の図像が鑄出されている。図像のある区画がともに左下区であることから、両者は同じ意味を有する図像であったと考えられ

る。なお、出土地不明東京国立博物館蔵銅鐸（J-36667）と出土地不明池田氏蔵銅鐸は外縁付鈕1式の中山型に属するが、互いに同範ではない。

【松帆5号銅鐸—島根県神庭荒神谷6号銅鐸 の同範関係】

松帆5号銅鐸は、菱環の外斜面に頂部で方向を変える斜線文を飾る。この文様構成は、この段階の銅鐸には比較的類例が少ない。また、下辺横帯の下界線は2条であるが、外縁付鈕1式銅鐸の多くはこれが3条である。さらに、全高が約23.5cmと小型の銅鐸の中ではやや大きいことなども勘案し、同範の可能性のある銅鐸を絞り込んだ。これらの条件を満たす銅鐸は島根県簸川郡斐川町神庭荒神谷遺跡出土の6号銅鐸であり、両者の範傷などを検討した結果、2個が同範であることが明らかとなった。具体的には、A面鈕の右付け根付近の、菱環外斜面から外縁にかけてのふくらみ、A面右鱗上部の2か所の範傷、B面右鱗と左鱗の上部のそれぞれ2か所の範傷などが、2個で一致した。範傷は神庭荒神谷6号銅鐸のほうが顕著なようであり、神庭荒神谷6号銅鐸が後鑄の可能性が高い。また、2個共に範傷が顕著なので、これらよりも先鑄の銅鐸が存在したと考えられる。

【その他の銅鐸】

松帆出土の残る3個の銅鐸のうち、1号銅鐸は菱環鈕2式である。この段階の銅鐸はほかに8個しかないので同範銅鐸の有無の確認が容易であるが、本鐸と同範の銅鐸はその中にはない。ただし、1号銅鐸は範傷の顕著であり、先鑄の同範銅鐸が存在したと考えられ、今後発見される可能性がある。

【同範銅鐸の検出の意義】

今回の検討で、松帆2・4・3・5号銅鐸について他遺跡出土の銅鐸との同範関係が判明した。これによって、この段階の銅鐸の製作地や流通の研究の進展が期待できる。

また、これらの同範銅鐸について、今後、鉛同位体比分析や成分分析を実施することで、銅鐸の材料金属の流通や入手状況の実態についても解明が進むと考えられる。

なお、同範銅鐸の製作順などについては、今後の調査で変わる可能性もあることを付記しておく。

松帆銅鐸について

平成 27 年 4 月に南あわじ市の石材製造販売会社の砂山から合計 7 点の銅鐸と 3 本の青銅製舌(音を鳴らすための棒)が見つかった。その後の調査で計 7 本の舌が確認された。

松帆銅鐸は青銅製舌が銅鐸内部に伴って発見されたことや、銅鐸や舌にそれらを吊下げる紐が結び付けられていた状態で発見されたこと、銅鐸内部に植物遺体が付着した状態で発見されたことなど全国初の発見が相次ぎ、今まで不明であった銅鐸の使用・埋納方法やその年代等の解明など、弥生時代の青銅器文化について新しい発見が期待されている。

平成 28 年 4 月より南あわじ市教育委員会が主体となり、同月に立ち上げた松帆銅鐸調査研究委員会の助言を得ながら松帆銅鐸の調査研究を現在進めている。



松帆銅鐸(奈良文化財研究所提供)

銅 鐸						
番号	型式	文様	高さ	底幅	重さ	備考
1号	菱環鈕2式	横帯文	26.6cm	15.5cm	1963.4g	
2号	外縁付鈕1式	4区袈裟襷文	22.4cm	12.8cm	1078.1g	1号内に入れ子
3号	外縁付鈕1式	4区袈裟襷文	31.5cm	17.5cm	2527.4g	鈕に紐残存
4号	外縁付鈕1式	4区袈裟襷文	22.4cm	13.5cm	1099.3g	3号内に入れ子
5号	外縁付鈕1式	4区袈裟襷文	23.5cm	計測不可	746.1g	身の下半部破損
6号	外縁付鈕1式	4区袈裟襷文	31.8cm	18.5cm	2584.4g	
7号	外縁付鈕1式	4区袈裟襷文	21.3cm	13.0cm	1206.3g	6号内に入れ子

舌(ぜつ)				
番号	舌の長さ	舌の重さ	ひもの太さ	備考
1号	13.0cm	126.5g	—	
2号	8.0cm	44.4g	—	
3号	12.8cm	136.2g	約5mm	
4号	8.8cm	46.7g	約4mm	組紐
5号	12.0cm	80.0g	—	別の銅鐸に伴う可能性あり
6号	13.8cm	131.2g	約4~8mm	
7号	7.8cm	36.1g	約3mm	

松帆銅鐸一覧表

か も い わ く ら い せ き
加茂岩倉遺跡

(所在地：島根県雲南市加茂町)

1996（平成8）年、赤川の支流を遡った谷奥の斜面中腹から、工事中に弥生時代の39個の銅鐸が出土して話題となった遺跡。北西3kmの位置に荒神谷遺跡がある。埋納坑に大小一組が入れ子状態で一括埋納されていたとみられ、10組20個が入れ子のまま取り上げられた。大型品は高さ約40cmが20個、小型品は高さ約30cmは19個。銅鐸の型式は、外縁付鈕式と扁平鈕式。鈕の頂部に「×」印を鑄造後に刻んだものが12個確認されている。



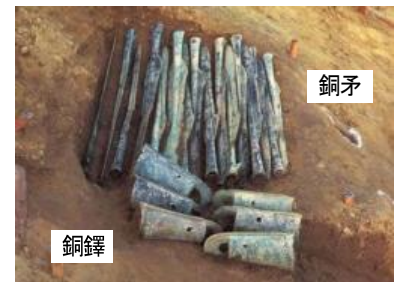
加茂岩倉遺跡から出土した39個の銅鐸

これまでに加茂岩倉遺跡出土の銅鐸で同範であると分かったものは26個あり、15組の同範関係が分かっている。そのうち、11組は他地域（鳥取・兵庫・徳島・和歌山・大阪・奈良・福井・岐阜・出土地不明）に分布する14個の銅鐸と同範関係にあることが分かっている。今回の松帆3号銅鐸を含めると加茂岩倉遺跡では同範銅鐸が27個となり、計16組の同範関係があり、他地域に分布する15個の銅鐸と12組の同範関係にある。

こうじんだにいせき
荒神谷遺跡

(所在地：島根県出雲市斐川町)

宍道湖の西南にある西谷丘陵の谷奥斜面地に立地する。1984（昭和59）年に発掘調査して弥生時代の銅剣358本が出土、翌年には銅矛16本と銅鐸6個が出土しており、いずれも一括埋納されていた。銅剣はすべて中細形の同じ型式のもので、少なくとも344本の銅剣の茎（なかご）部には「×」印が刻まれおり、加茂岩倉遺跡との共通性が伺える。銅矛は中細形2本と中広形14本があり、中広形のうち7本に意図的な「研ぎ分け」が認められ、九州から持ち込まれたものと考えられている。銅鐸は、菱環鈕式1個、外縁付鈕式5個で構成され、全て高さ25cm未満である。



荒神谷遺跡から出土した青銅器

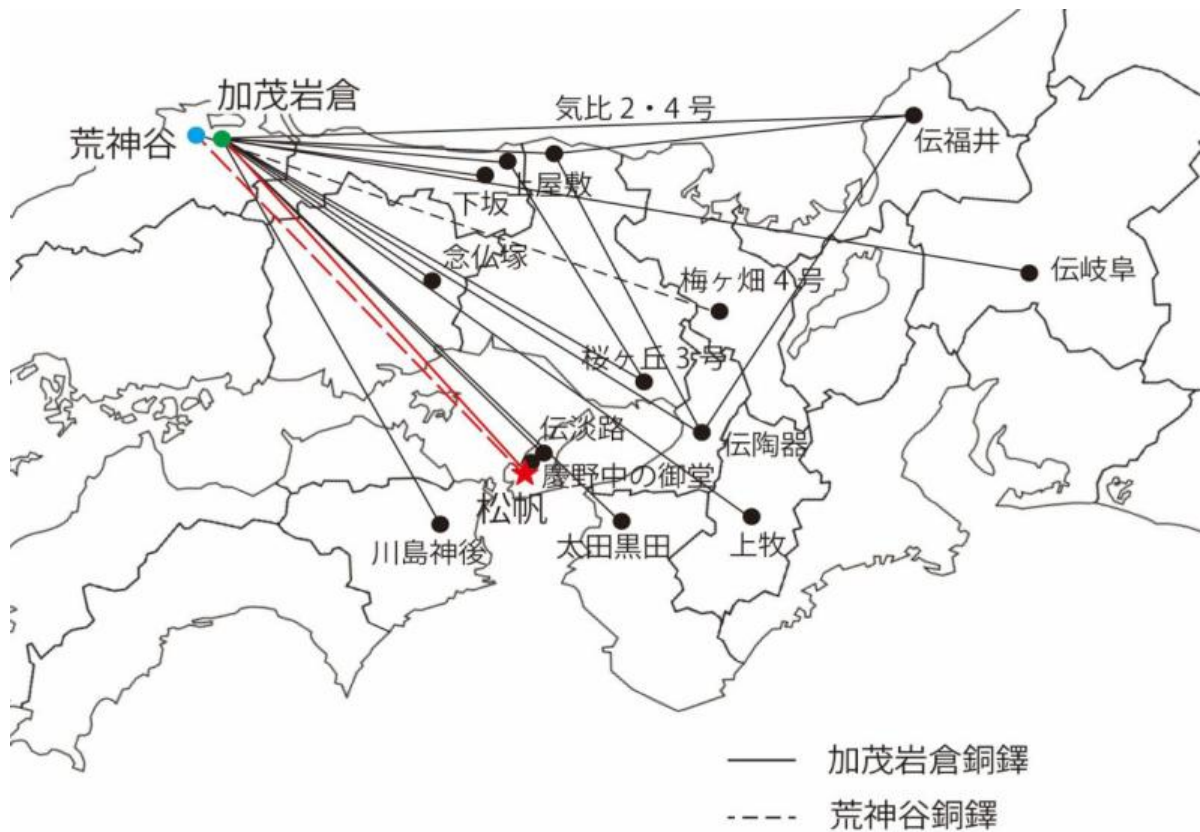
これまでに荒神谷遺跡出土銅鐸で同範と分かっているものは2個あり、2組の同範関係が分かっている。2組とも他地域（京都・出土地不明）に分布する3個の銅鐸と同範である。（※出土地不明銅鐸は2個）

今回の松帆5号銅鐸を含めると荒神谷遺跡では同範銅鐸が3個となって計3組の同範関係があり、他地域に分布する4個の銅鐸と3組の同範関係にある。



荒神谷遺跡から出土した6個の銅鐸

(写真：加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡の各報告書・図録から転載)



加茂岩倉・荒神谷遺跡出土銅鐸		他地域に所在する同範銅鐸
加茂岩倉銅鐸	1号鐸・26号鐸	
	3号鐸・30号鐸	
	4号鐸・7号鐸・19号鐸・22号鐸	太田黒田銅鐸(和歌山県)
	5号鐸	気比2号銅鐸(兵庫県)
	6号鐸・9号鐸	辰馬419号銅鐸
	11号鐸	川島神後銅鐸(徳島県)
	13号鐸	下坂銅鐸(鳥取県)
	14号鐸・33号鐸	
	15号鐸	伝淡路国銅鐸(兵庫県・本興寺蔵)
	16号鐸	岐阜県銅鐸(所在不明)
	17号鐸	上牧銅鐸(奈良県)
	21号鐸	気比4号銅鐸(兵庫県)・伝陶器銅鐸(大阪府)・伝福井銅鐸(明大1号銅鐸)
	24号鐸・38号鐸・39号鐸	
	27号鐸	松帆3号銅鐸(兵庫県)
	31号鐸・32号鐸・34号鐸	上屋敷銅鐸(鳥取県)・桜ヶ丘3号銅鐸(兵庫県)
36号鐸	念仏塚銅鐸(岡山県)	
荒神谷銅鐸	2号鐸	梅ヶ畑4号銅鐸(京都府)
	3号鐸	出土地不明銅鐸2個
	6号鐸	松帆5号銅鐸(兵庫県)

加茂岩倉銅鐸・荒神谷銅鐸同範関係図

『加茂岩倉遺跡』2002 鳥根県教育委員会・加茂町教育委員会 に加筆
 参考文献 『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』2007 難波洋三



東奈良遺跡(大阪府)



唐古・鍵遺跡(奈良県)



上高野(兵庫県)

銅鐸鑄型出土例

松帆銅鐸同範銅鐸調査について

大阪大学大学院 教授 福永伸哉

(1) 出雲の銅鐸と淡路の銅鐸との同範事例が増し、淡路を含む東部瀬戸内と日本海側との「銅鐸ネットワーク」がいつそう明瞭になった。日常用土器の移動からはうかがい知れない弥生時代の広域交流の様子が浮かび上がった。

(2) 荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡との同範関係が判明した松帆3号鐸、松帆5号鐸は弥生中期前葉の製作と考えられる外縁付鈕1式。しかし、荒神谷、加茂岩倉では同じ埋納坑から弥生中期後葉の中広形銅矛（荒神谷）、扁平鈕2式鐸（加茂岩倉）が共伴しており、埋納時期は弥生中期末頃（西暦紀元前後）と考えられる。これらの外縁付鈕1式は200年以上使用された後に埋納に至った。松帆銅鐸でも同様なのか。松帆3号鐸、5号鐸の埋納時期が突き止められれば、製作、使用、最終埋納に至る銅鐸の「ライフサイクル」に迫ることができる。

(3) 荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡とは同範関係にありながら、松帆銅鐸のみに青銅製の舌が伴っていた。使用実態を反映しているのか、埋納時の取り扱いの差なのか、興味深い相違である。

(4) 以上のように、同範関係という情報が明らかになったことにより、解明すべきポイントがより明確になってきたといえる。今後の調査研究に大いに期待している。